

<実践事例>

現代社会学部スタート時のバズランチとラボ活動

河原 省吾¹

京都産業大学現代社会学部は2017（平成29）年度に開設された。正課のカリキュラムと並んで学生のニーズに応えようとしたのが、バズランチやラボ活動といった正課外活動であった。バズランチは昼休みに昼食をとりながら教員と学生が自由に話せる場として設置し、2017年度春学期の授業期間に60回実施、のべ2,000人近くの学生が参加した。ラボ活動は学生が1年次生のうちから種々の問題解決を目指す実践活動に自主的自発的に参加できる場として設定した。学部開設1か月後にラボ活動説明会を開き、春学期中に約100名の学生がラボ活動に関わった。本稿はこのバズランチとラボ活動のスタート時の記録である。

キーワード：現代社会学部開設、バズランチ、ラボ活動、正課外活動

1. はじめに

現代社会学部開設年度の授業開講と同時に始めたバズランチには、2017（平成29）年度春学期にのべ2,000人近くが参加し、各種のラボ活動の立ち上げには現代社会学部1期生400名中約100名が関わった。

バズランチは教員と学生の垣根を低くして、昼食をとりながら自由に話し合う場として設定した。サギタリウス館のS219教室に授業期間の月・火・木・金曜日の12:30～13:00に集まった。現代社会学部がスタートした2017年度春学期の授業期間に全15週計60回のバズランチを実施した。

ラボ活動は問題解決のための実践への意欲をもつ1期生に1年次のうちから様々な実践活動を可能にする仕組みとして、現代社会学部の正課外活動の枠組みを考えたものである。

基礎的な勉強をしてから実践活動をするべきだという考え方もあるが、実践と勉強を同時にスタートして、実践の中で知識の必要性を痛感することによって、学びの動機づけも高まると考えた。

バズランチとラボ活動に対する学生の満足度には高いものがあり、新しく出発した学部にあふさわしい正課外活動となった。ここに報告する1年目の春学期は日々新しい出来事の連続であり、1期生と共に教職員も高揚した日々であったといえる。

2. 入学前から授業開始まで

2.1. 入学前教育・入学後教育について

現代社会学部開設の前年度より、リーダー育成のための入学前教育・入学後教育をどのように展開するか議論をおこない、筆者がその責任者となった。

入学前教育・入学後教育をつらぬく考えとして、①学生1人1人に応じた成長・能力開発を支援する、②伸びる可能性を見きわめて、その開花を助ける、③自信に欠けるところを支え、エンパワーする、の3点が挙げられた。

リーダーは学部の正課および正課外活動においてリーダーシップを発揮し、将来は社会でそれを生かすことが期待された。学部ではその受け皿としてリーダー育成のためのセンター機能をもつ仕組みが必要だと考えた。具体的には定期的な集まりやイベントの企画・運営などである。定期的な集まりはバズランチの形で、イベントの企画・運営はラボ活動の形で具体化した。

2.2. 入学前教育（内部生）

高大接続授業のため附属校に全10回出向き、現代社会学部1期生となる内部生27名を前年度から知ることができた。初めは内部生が1期生の中核となることを構想した。しかし、真面目に取り組む生徒が多い反面、言われたことはできるがそれ以外のことはしない傾向も感じられた。附属高校では探究的な活動をおこない、グループワークやプレゼンにも力を入れているので、それが大学

¹ 京都産業大学 現代社会学部

進学後に生かしきれていない面もあると思われる。今後の高大接続の課題である。

2.3. 大学登校（スクーリング）（内部生）

高大接続授業の仕上げと大学進学後との中継点として、2月に2回の大学登校日を設けた。第2回には学生ファシリテーターの助けを得て、内部生が大学生活を思い描きやすくする目的で、「ワールドカフェ」「座談会」「学内マップ作成」などを内容とするワークショップを実施した。

3月28日（火）の英語プレイスメントテスト後の時間に内部生の運営による新入生イベント「キャンパスオリエンテーリング」を実施することを検討したが、相当かちりと定めたプログラムに基づいて指導助言をしないと難しいだろうと判断して、このイベントは他学部上級生の学生ファシリテーターによる運営によってオリエンテーションのモデルを提示するという形で実行した。新入生400名中140名が参加して入学生どうしの交流も見られた。

2.4. 入学前教育（次世代生）

次世代型リーダー選抜入試はワークショップを実施したりして、従来のAO入試と一味違う選抜方法により、1期生の中核となるメンバーを集めた。合格者（「次世代生」と呼んだ）23名には11、12、1、2月の4回にわたる通信添削のやり取りによって入学前教育を実施した。次世代生の大部分が意欲的に通信課題に取り組み、次世代生を迎える教職員の期待も高まった。

2.5. 大学登校（スクーリング）（次世代生）

3月に実施した入学前の登校日は入学前教育の仕上げとして、全国から23名全員が集まった。次世代生どうしが知り合う機会ともなり、1日プレゼンテーションやグループワークに取り組むことで、次世代生の士気が大いに高まった。

2.6. 2017年度スタート

新年度を迎え、新任教員も着任して、新しいことが始まるという期待が高まった。課外の取り組みに学生が注目するには最初の勢いが大事だと考えた。新しい学部を創設していく教職員や次世代生の気持ちの高まりが力となって、正課外活動を開始し展開する絶好の機会であった。

4月5日（水）学部開設記念イベント

現代社会学部1期生400名の大半が参加した学部開設記念イベントにおいて、次世代生が重要な役割を果たした。次世代生には高校で生徒会長や

部活のキャプテン等を務めた者も多くいて、新入生ながら物怖じしない堂々たる進行ぶりは同じ新入生たちに驚異の眼差しをもって受け止められた。

筆者は開設記念イベントにおいてバズランチとラボ活動を次のように説明し、明日からのバズランチへの参加を呼びかけた。

- ① 学生と教職員の垣根を低くしてコミュニケーションを取りやすくする→バズランチ
- ② 教員の助言のもと様々な問題解決のための実践に自主的に挑戦する→ラボ活動

3. ラボ活動説明会に向けて

新学期の授業スタートと同時に、バズランチを開始した。

4月6日（木）バズランチ第1回（教員3名、学生20名参加（以後、「3、20」のように表す））次世代生はほぼ集まった。

4月7日（金）バズランチ第2回（5、10）

4月10日（月）バズランチ第3回（3、30）次世代生が集まって盛り上がっている。「6月オープンキャンパスの企画アイデアを考えてみてほしい」と持ちかけると乗り気な反応であった。学部教務委員会でラボ活動開始について話し合った。

4月11日（火）リーダー育成委員会の中でラボ活動は「モチベーションを上げる実践」と話し合った。

4月11日（火）リーダー育成委員会の中でラボ活動は「モチベーションを上げる実践」と話し合った。

バズランチ第4回（7、40）次世代生以外からも「ラボ活動をしたい」という声上がる。

4月13日（木）バズランチ第5回（5、40）次世代生がラボ活動説明会のちらし案を作ってきた。

4月14日（金）バズランチ第6回（5、40）次世代生が自主的に出身地特産のシラスを持参してシェアしていた。

4月17日（月）ラボ活動説明会のちらしを入門演習の各教室に配布した。

バズランチ第7回（4、30）手品を披露する次世代生もいるし、友人のできにくい内部生も来ている。

4月18日（火）バズランチ第8回（4、30）参加者に声をかけ、ラボ活動説明会の宣伝をする。

4月19日（水）ラボ活動説明会のちらしを入門演習の各教室に配布した。教員間で「次世代生が盛り上がっていて、他の学生が入れない」「1人で来る学生には、教員がつながらないと来なくなる」「離れて座っている学生には、教員が声をかけるのがよい」などと話し合った。

教授会でラボ活動開始について報告し、各教員に協力を要請した。

4月20日(木) バズランチ第9回(5、20)「1分間スピーチ」をすると、「なぜ京産大現代社会学部に来たのか」という話をする学生が多かった。自らの初心と動機を確認する感じであった。

4月21日(金) ラボ活動説明会のちらしを入門演習の各教室に配布した。

バズランチ第10回(8、25)「1分間スピーチ」では、次世代生以外のリーダー的顔ぶれも登壇した。

リーダー育成委員会の教員が内部生に集まりを呼びかけるが、集まった内部生は3名だった。

ラボ活動説明会に学生がどれくらい集まるかが読めない。次世代生以外にはほとんど来ないかもしれない。次世代生頼みになりがちな問題もあり、次世代生にも自分たちが出過ぎることへの警戒感がある。「上賀茂」「6月オープンキャンパス」のラボ活動は、学生に声をかけてゴールデンウィーク明けからスタートできると思う。バズランチに1回だけ参加する学生もいて、これらの学生がラボ活動の各チームに定着して活動するようになればよいと考えた。

4月22日(土)「ラボ活動始動!説明会のおしらせ」をPOSTに掲示した(図1)。

タイトル	ラボ活動始動!説明会のおしらせ
本文	<p>現代社会学部1期生の皆さんの入学時の熱い思いを実現する場、それがラボ活動です。</p> <p>皆さん自身が地域の課題に取り組んだり、これから入学してくる高校生と一緒に活動したり、様々な企画を一から練り上げていったりできます。</p> <p>課題別にチームをつくり、それぞれ現代社会学部の先生が相談役として付けてくださいます。</p> <p>ラボ活動での経験は、授業や進路に役立つのはもちろんのこと、これから皆さんの人生の糧となることでしょう。</p> <p>1期生の皆さんの知恵と力とやる気をここに結集しましょう。</p> <p>■ラボ活動の例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上賀茂学区まちづくりビジョン策定への協力 ・オープンキャンパスにおける学生企画 ・その他さまざまな企画(皆さんの斬新なアイデアを待っています)

■説明会

第1回 4月26日(水)3限目 サギタリウス館 S219教室

第2回 5月1日(月)3限目 サギタリウス館 S219教室

どちらかの回だけの参加も可能です。また、説明会には参加できないが関心があるという人は、下記を参照してください。

■質問・相談

毎週、月・火・木・金曜日の昼休みに、サギタリウス館 S219教室にてバズランチを実施しています。昼食をとりながら、先生や仲間と語り合いましょう。

ラボ活動についての質問や相談は、バズランチで河原(現代社会学部教授)までどうぞ。

図1 POSTメッセージ(4月22日(土))

4月24日(月) バズランチ第11回(6、45) ラボ活動説明会の掲示。次世代生には「次世代生はラボ活動をするものだと思っていた」という認識があった。

4月25日(火) バズランチ第12回(5、30) ラボ活動説明会の掲示。いつも来るが1人で座って他と交わらない学生が3名いる。「サギタリウス・チャレンジに応募したい」という学生が来て、企画書を見て助言した。

4. ラボ活動説明会

4月26日(水) ラボ活動説明会第1回

5月1日(月) ラボ活動説明会第2回

2回実施したラボ活動説明会の参加者を表1に示した。「一」はその回の説明会に参加していないことを表す。第1回には45名、第2回には46名、のべ91名の学生が参加し、実人数では68名の学生が少なくともどちらかの回に参加した。説明会では説明だけではなく、関心のあるテーマごとに集まってグループワークをおこない、全体で発表し合った。バズランチにも姿を見せていなかった学生が個性的な発表をしたりして、これから何かが始まるという期待と熱気に満ちた時間であった。教員は第1回に14名が参加(第2回は学内の新任教員研修会が同時に開催されたため、4名。現代社会学部の教員はその大部分が新任であった)。

ここで今後展開するラボ活動の各チームのもととなる形が始まった。「上賀茂」とは北区役所の

コーディネートにより上賀茂学区自治連合会との協働によって「上賀茂学区まちづくりビジョン」を策定するプロジェクトである。「6月OC」とは6月のオープンキャンパスの学部企画を企画・運営するものである。「サギチャレ」はサギタリウス・チャレンジに企画を考えて応募するものであり、「商店街ライブ」が企画された。「情報発信」は学部の情報を各種メディアを通じて発信していることとする「学部情報発信プロジェクト」であり、「現社祭」は秋に学部祭を企画しようとするものであった。また、「自由企画」というのは、この時点でまだテーマが絞られていなかったもので、ここから「坂道・着物」「シンボル・マスコット・ゆるキャラづくり」などのラボ活動へと発展していった。

ラボ活動説明会に参加できなかった学生でラボ活動に参加したいという者も、少なからず存在した。それらの学生には以後のバズランチで説明をおこなったり、始動した各チームに紹介したりした。

表2に5月17日時点のラボ活動の状況を示した。5月末までに90名以上がいずれかのラボ活動に参加した（一部の学生は複数のラボ活動に参加）。

その後、様々なラボ活動等が生まれ、展開し、終了していった。参考に2年後の2019年4月の時点でリーダー育成委員会で報告されたラボ活動等の一覧を表3に示した（この中にはラボ活動の枠組みから外れていった活動もある）。2年間でこのような形に分化、発展していった。この間に終了した活動もある。

表1 ラボ活動説明会参加者

学生	学科	次世代/ 内部	第1回	第2回
1	現社	次世代生	上賀茂	上賀茂
2	現社	次世代生	上賀茂	上賀茂
3	現社	次世代生	上賀茂	上賀茂
4	現社	次世代生	上賀茂	上賀茂
5	現社	次世代生	上賀茂	—
6	健スポ	次世代生	上賀茂	—
7	現社	次世代生	—	上賀茂
8	現社	内部生	上賀茂	—
9	現社		上賀茂	上賀茂
10	現社		上賀茂	—
11	現社		—	上賀茂
12	現社		—	上賀茂
13	現社	次世代生	6月OC	6月OC

14	現社	次世代生	6月OC	6月OC
15	現社	次世代生	6月OC	6月OC
16	健スポ	次世代生	6月OC	6月OC
17	現社	次世代生	自由企画①	6月OC
18	現社	次世代生	自由企画②	6月OC
19	現社	内部生	6月OC	—
20	健スポ	内部生	—	6月OC
21	現社	内部生	—	6月OC
22	現社		6月OC	6月OC
23	現社		6月OC	6月OC
24	現社		6月OC	6月OC
25	現社		6月OC	6月OC
26	現社		—	6月OC
27	現社		—	6月OC
28	現社		サギチャレ	サギチャレ
29	現社		サギチャレ	サギチャレ
30	現社		サギチャレ	サギチャレ
31	現社		—	サギチャレ
32	現社		—	サギチャレ
33	現社		情報発信	情報発信
34	現社		情報発信	情報発信
35	現社		情報発信	情報発信
36	現社		情報発信	—
37	現社		情報発信	—
38	現社		—	情報発信
39	現社		—	情報発信
40	現社		—	情報発信
41	現社		—	情報発信
42	現社		—	情報発信
43	現社		—	情報発信
44	現社		—	情報発信
45	現社		—	情報発信
46	現社		—	情報発信
47	現社		自由企画①	現社祭
48	現社		自由企画①	—
49	現社		自由企画①	—
50	現社		自由企画①	—
51	現社		自由企画①	—
52	現社		—	現社祭
53	現社		—	現社祭
54	現社		—	現社祭
55	現社		—	現社祭
56	現社		自由企画②	—
57	現社		自由企画②	—
58	現社		自由企画②	—
59	現社		自由企画②	—
60	健スポ		自由企画②	—
61	現社	次世代生	自由企画③	—

62	現社		自由企画③	—
63	現社		自由企画③	—
64	現社		自由企画③	—
65	健スポ		自由企画③	—
66	健スポ		自由企画③	—
67	健スポ		6月OC	スポーツ
68	健スポ		—	スポーツ

表2 ラボ活動の状況 (2017年5月17日)

	企画	事業主体等	説明会第1回	説明会第2回	教員アドバイザー	日程
A	6月OC学生企画	現代社会学部(入学センター)	10名	14名		5月2日(火) 役割決定(16名確定) 6月11日(日)OC
B	上賀茂学区まちづくり案策定への協力	北区	9名	8名		5月16日(火) メンバー確定(15名)
C	「現社祭(仮称)」企画・運営プロジェクト	現代社会学部(入学センター)	(「自由企画」18名)	5名		5月15日(月) オープン・ブレインストーミング(23名) 9月10日(日) 「現社祭(仮称)」
D	「情報発信」プロジェクト	現代社会学部	5名	12名		5月12日(金) 自主的集まり(10名) 5月24日(水) スタート
E	サギタリウス・チャレンジ「新大宮商店街・大学生バンド・ライブ」	サギタリウス・チャレンジ	3名	5名		5月8日(月) サギチャレ申請 6月2日(金) サギチャレ結果発表
F	健康づくり・スポーツ大会(坂道プロジェクト)	現代社会学部	(「自由企画」18名)	2名		5月18日(木) 話し合いスタート
G	8月OC学生企画	現代社会学部(入学センター)				8月5日(土)・6日(日)・19日(土)OC
H	北区「健康長寿のまちづくり」	北区				5月17日(水) 北区役所と打ち合わせ
I	附属高校高大接続授業フィールドワークのファシリテーション	現代社会学部、教育プログラム支援制度				春学期 学生ファシリテーション研修 秋学期 接続授業(10回)中にフィールドワーク

表3 ラボ活動等 (2019年4月)

	名称	代表学生	担当教員	概要
1	坂道・着物プロジェクト			京都産業大学の特徴である「坂道」を一番にイメージし、困難な坂もプラス思考で考え、どんな事(坂道)にでもチャレンジして行動する事を目標としている
2	京産現社カフェ(番組ツイッター@KSU_Genshacafe)			現代社会学部のメンバーが毎月第2月曜日に京都市北区のコミュニティFM「RADIO MIX KYOTO FM87.0」で放送する生中継ラジオ番組。同時にYouTube LIVEにてライブ配信もしている。企画や脚本づくり、取材からパーソナリティ、スタジオの収録や編集に至るまで、番組制作のほとんどを学生だけで進めている
3	社会学カフェ			学内外で現代社会の問題を議論をし、社会に影響を与えていこうとする取り組み。高校生と討論、OCで討論、起業家大学生と討論、実際にcaféで討論など。今年度最初はバズランチで、性の多様性をテーマに議論をする予定
4	北区健康長寿プロジェクト			京都市北区で健康づくりとそれをサポートする環境づくり(マップ作成、拠点づくり、広報活動等)を展開
5	北区食育プロジェクト			京都市北区中学校での食育活動(料理カードを用いた朝食メニュー作成サポート・啓発リーフレット作成)を展開
6	KCA-Self-Ceated-Laboratory			ダンスの要素を取り入れたスポーツ教室の開催を目指している。週1回の勉強会を通じ、知識の共有とダンス実技、指導法の研究を行なっている
7	Ide 編集部			2017年:フリーペーパー「井手の名水を巡る」を作成し、新聞やNHKで紹介される。井手町のHPでも掲載。 2018年:継続事業を検討。別途、井手町で商店街ライブを実施 2019年:事業の実施の有無も含めて検討予定
8	まちづくり研究会			様々な地域でまちづくり活動を行っている方を招聘し、勉強会を開催する。勉強会への参加に関しては、基本的に本学の学生であれば誰でも参加可能とする

9	隠岐の島町の地域課題解決(予定)		島根県隠岐の島町で世代を超えた交流の場を設け、少子高齢化が進んだ地域の課題解決を目指す
10	上賀茂プロジェクト(予定)		2017年度に北区役所、上賀茂学区自治連合会、現代社会学部の協働で策定した「上賀茂学区まちづくりビジョン」(以下「ビジョン」)を受けて、学生が上賀茂学区に入り、地域の行事に参画したり、地域住民とのコミュニケーションを通じてビジョンの推進に寄与する

5. バズランチについてのまとめ

第1回から第21回まで(4月6日から5月16日まで)のバズランチへの教員と学生の参加者数を表4と図2に示した。図2の棒グラフ(右側の目盛り)は教員の参加者数、折れ線グラフ(左側の目盛り)は学生の参加者数を表している。毎回教員3~8名、学生10~45名が参加した。第21回までは曜日による参加人数の多寡は特に見られなかった。

表4 バズランチ参加者数

回	月日	曜日	教員(人)	学生(人)
1	4月6日	木	3	20
2	4月7日	金	5	10
3	4月10日	月	3	30
4	4月11日	火	7	40
5	4月13日	木	5	40
6	4月14日	金	5	40
7	4月17日	月	4	30
8	4月18日	火	4	30
9	4月20日	木	5	20
10	4月21日	金	8	25
11	4月24日	月	6	45
12	4月25日	火	5	30
13	4月27日	木	3	25
14	4月28日	金	3	25
15	5月2日	火	4	40
16	5月8日	月	3	30
17	5月9日	火	6	20
18	5月11日	木	4	20
19	5月12日	金	3	25
20	5月15日	月	6	40
21	5月16日	火	7	45

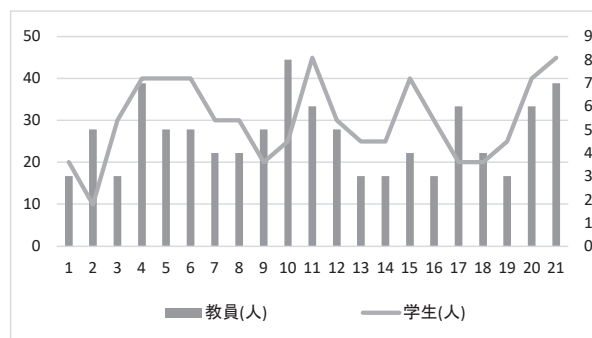


図2 バズランチ参加者数

5月23日(火)、25日(木)、26日(金)、29日(月)の1週間にバズランチに参加した学生を対象にアンケートを実施した。アンケートの結果を表5~8と図3に示した。表5にみられるように、のべ91名、実人数で51名より回答が得られた。5月29日はバズランチの第28回にあたる。この時点では、月曜日と金曜日のバズランチにおいていくつかのラボ活動がミーティング等をおこなっていたため、月・金の参加者が多くなっている。表6「バズランチに参加した目的・理由」においても「ラボ活動に参加するため」が第1位であった。

表5 アンケート回答者数

月日	曜日	回答者数(人)	うち新規回答者数(人)
5月23日	火	19	19
5月25日	木	8	3
5月26日	金	32	18
5月29日	月	32	11
計		91	51

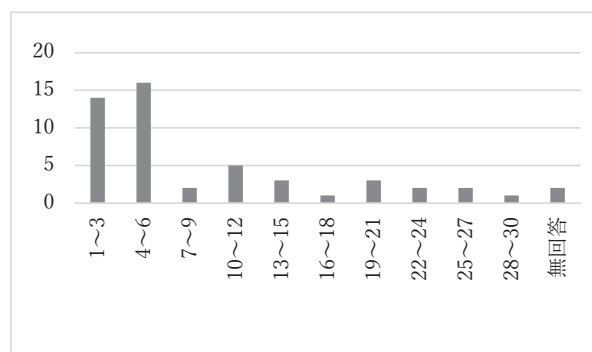


図3 参加回数別人数

表6 バズランチに参加した目的・理由
(複数回答)

目的・理由	人
1 ラボ活動に参加するため	34
2 昼食をとるため	19
3 他の学生と交流するため	17
4 教員に質問や相談をするため	14
4 昼休みの居場所として	14
6 情報を手に入れるため	13
7 教員と交流するため	12
8 楽しそうなので	9
9 どんな場所なのか興味があったため	8
9 時間つぶしのため	8
11 特定の人に会うため	7
12 誘われたため	6
13 宿題や勉強をするため	1
13 その他(現社祭)	1
13 その他(部活の宣伝ができるか見る)	1
計	164

表7 バズランチに満足しているか

	人
満足している	20
どちらかといえば満足している	22
どちらともいえない	7
あまり満足していない	1
満足していない	0
無回答	1
計	51

表8 バズランチを続けるとよいか

	人
続けるとよい	44
続けなくてよい	0
どちらともいえない・わからない	7
計	51

図3に見られるように、参加回数1～6回の少ない回数の参加者が多い(横軸は参加回数、縦軸は人数。参加回数は自己申告)。一方、毎回のように参加している学生も少数ながら存在した(毎回参加すると28回になる)。

表6に見られるようにバズランチに参加する目的や理由は多岐にわたっている。筆者らの当初の予想(主として「教員と学生のコミュニケーション」を予想していた)をこえて、バズランチは多様な目的をにないつつあった。

6. 考察とまとめ

6. 考察とまとめ

現代社会学部開設第1期生には個性的で意欲的な学生が多く集まった。「社会学入門」「入門演習」などの1年次生配当科目にも熱心に取り組んだが、「もっと何か実践をしたいし、交流もしたい」という気持ちが1期生にはあふれていた。バズランチとラボ活動はそれに応える正課外活動となった。

6.1. 教員による助言・指導・介入について

学生の活動においては様々な問題が生じるが、むしろそれも成長の大切な機会と捉えて生かしていくことができる。ただ、そうした問題が生じた際に学生だけに任せておくと、仲違いやドロップアウトが起きることも少なくない。教員が普段順調に活動しているときには口を出さなくとも、学生の活動の様子やメンバーの動きにはよく目配りをしていて、ここという時には必要な介入をすることが重要である。

次世代生はバズランチでもラボ活動でも活躍したが、表1を見ると分かる通り、一部のラボ活動に次世代生が集中している。これは使命感をもって組織的に活動したというよりは、自分たちの親密指向を満足させる要素(仲良し活動指向)が強かったからだと思う。ラボ活動は自発的、自主的な活動なので、どの活動を選ぶかということについて教員が働きかけをあまりせずに、学生自身に任せた結果である。

教員がラボ活動にどの程度助言、指導、介入するのかというのは悩む問題である。一概に決めることは難しく、活動の段階、内容、課題等によって大きく変わってくると考える。また、ラボ活動にアドバイザー役の教員を定めることは定着したが、各活動に1名の教員が付くのか複数の教員が付くのかに関しては、どちらにも一長一短があった。学生間の問題や教員学生間の問題が生じることを避けるという点では、複数の視点をもてる複数教員担当制が望ましいというのが筆者の意見である。

6.2. バズランチやラボ活動が成立する条件について

現代社会学部のスタートアップ時に開始し展開したバズランチとラボ活動は、学部を問わず実施可能な正課外活動だと思われるが、現代社会学部

特有の好条件として、「まちづくり」「地方創生」「社会実践」「情報発信」などの実践活動に関心を抱いて入学してくる学生の少くないことが挙げられる。

教職員がこのような正課外活動に関して、正課カリキュラムと相まって展開することが重要で必要だという確信をもち、学部としての合意が形成されたなら、学生からも強く支持され学部づくりの核としての役割をになうことも可能である。

学生に内発的な意欲を外から植え付けることはできない。教職員にできるのは学生たちの様子をいつもよく見ていて、時機をとらえ、学生のもつ内発的な意欲を損なわないようにサポートしていくことだけである。学生がこのように守られた場で自由に活動できることそれ自体が学部の正課外活動の目標となると考えられる。

“Buzz Lunch” and “Lab Activities” at the beginning of Faculty of Sociology

Shogo KAWAHARA¹

The purpose of this paper is to provide a record of “Buzz Lunch” and “Lab Activities.”

The Faculty of Sociology at Kyoto Sangyo University was founded in 2017. The faculty launched extra-curricular activities: the Buzz Lunch and Lab Activities.

Buzz Lunch was a free conversation time between professors and students that was held 60 times in the first semester. A total of nearly 2,000 students attended it.

Lab Activities comprise problem solving activities in which students voluntarily participated. Approximately 100 students completed one such activity in the first semester.

KEYWORDS: The Beginning of Faculty of Sociology, Buzz Lunch, Lab Activities, Extra-Curricular Activities

2022年11月25日受理

1 Faculty of Sociology, Kyoto Sangyo University